

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 14 日現在

機関番号：32647

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12271

研究課題名(和文) 夫における認知症介護準備態勢の自己評価式尺度の開発

研究課題名(英文) Development of a self-assessment scale for dementia care preparedness of elderly males

研究代表者

根岸 貴子 (Negishi, Takako)

東京家政大学・健康科学部・教授

研究者番号：40709250

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は男性高齢者における介護準備態勢自己評価尺度を開発し、信頼性・妥当性を検討することを目的とした。60歳以上の男性高齢者に質問紙調査をし、274名を対象に探索的因子分析を行った結果、因子負荷量の低い項目を削除し、4因子17項目の尺度となった。4つの因子は「夫婦の愛情」「家事遂行力」「介護に関する知識」「助け合う仲間存在」と命名した。Cronbach's α 係数は尺度全体で .85と内的整合性が保たれ、暮らし向きと主観的健康感において、分散分析にて有意な主効果があり、一定の妥当性が確認された。作成した尺度は、4因子17項目より構成され、信頼性と一定の妥当性を有することが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本尺度は、介護に携わっていない男性高齢者が、将来の介護においてどの程度準備できているかを自己評価して、介護準備態勢を知ることを目的とした尺度である。尺度活用において、現時点での介護学習や方法、仲間との相談関係、もしくは夫婦関係の見直しなど、自己の介護の準備性を知り、介護準備の内発動機づけになる。健康な時期に介護の準備しておくことで将来の介護の不安の軽減につながる。また、講座等の学習開始時に介護準備態勢を評価することで、講義に対するモチベーションも高まると考える。尺度を自己評価して参加者同士ディスカッションなど、他者と自己の違いや共通点を見出すことで学習意欲も高まることが期待される。

研究成果の概要(英文)：This study aims to develop a self-assessment scale for care preparedness in elderly males and to examine the reliability and validity of the scale. As a result of an exploratory factor analysis using the data from 274 elderly males, items with low factor loads were deleted, resulting in a care preparedness scale with 4 factors and 17 items. The four factors were named "Elderly couple's affection", "housework performance", "knowledge about care", and "presence of friends to assist in the care". The Cronbach's α coefficient was .85 for the entire scale and .84 to .91 for the subscales, showing sufficient internal consistency. A significant main effect was found by the subscale analysis of variance in terms of lifestyle and subjective well-being, and a level of validity was established. The reliability and level of validity of the self-assessment scale for care preparedness in elderly males developed in this study was established.

研究分野：老年看護学

キーワード：男性介護 介護準備 尺度開発 高齢介護

1. 研究開始当初の背景

高齢者の4人に1人が認知症または予備軍と言われている現在、認知症は老年期の不安の要因になっており、政府は認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）を策定し対応している。また要介護者数も増加しており、夫婦二人暮らしの世帯の増加により男性介護者も増加している。従来、「介護は女性の役割」とされてきたジェンダー規範が介護保険制度による介護の社会化や女性の社会進出により、男性介護は着実に家族介護モデルの変容をきたしている。男性介護の特徴について概観すると、外部に支援を求めず孤立しやすい（永井，2011；一瀬，2001）や、男らしさの伝統的規範にしばられ一人で抱え込みやすい傾向（斎藤ら，2003；津止ら，2007）コミュニケーションは親密が欠ける（水島，2010）など、男性特有の問題が指摘されている。さらに女性介護者以上に介護を生きがいとして高い価値観を抱いている（一瀬，2004）など、肯定的な介護の姿勢もうかがえる。夫婦関係においては、介護発生によって人間関係の転換が生じる一方、伝統的な夫婦の勢力関係は維持されており、自分自身を準拠点におき夫主体の介護をしている（林，2007）など報告されている。役割関係の転換は生じても、被介護者の妻が夫に従わなければならない伝統的規範が残っていることが指摘される。これは、男性介護のモデルとなる規範とないことも一因である。

認知症者の急激な増加に伴い、「認知症の人が住み慣れた地域で暮らせるよう」というスローガンを掲げ啓蒙に取り組んでいるが、高齢者自身に浸透しているとは言い難い。筆者は認知症の妻を長期間介護してきた夫介護について質的調査をしてきた。その結果は妻が認知症という「予期せぬキャリア」に対して「夫が妻を守る責任」と「夫婦として支えあってきた絆」「子供に頼れないとしての父親の立場」から「介護を受け入れる立場を構築」していた。「仕方ない」という割り切りで事態を受け入れていた。実際の介護は「妻の変化による困惑と苦悩」「家事困難」の二重の負担が続き、ぎりぎりの状態まで外部にアクセスせず危機的な状況に陥っていた。この時期は「シングル抱え込み期」として、納得のうえ介護を始めたわけではなく、引き受けざるをえないことによる心身のストレスが強い状況であった。また、認知症介護が他の介護と異なる点は、認知症初期は症状が明らかでないため、家族のみで対応し徐々に深刻さが増すという点である。この間は年単位で経過し、介護者の心身の疲労の結果、暴言暴力、ひいては虐待等の問題が発生している（北村，2014）。この時期を多くの夫たちが、「最も苦しかった時期」と語っており、認知症に対する理解と介護者として事前の準備態勢が望まれる。

男性高齢者に目を転じてみると、彼らは定年退職後の人生をよりよい人生をするために、健康に気を遣いながら、必要と思われることについては積極的に取り入れようとする姿勢を持ち合わせていた。加齢現象と病気が前向きな姿勢をゆるがすことを実感し、認知症や介護について関心を高く

持っていた（根岸ら，2013）。しかし、実際の介護準備については不十分で、単身高齢者においては約半数が特に準備していないと答えている（Life Design, 2014）。介護についての不安がありながらも対策を講じていないことが現状である。老年期の健康な時期に介護に対する事前の教育・心構えをしていくことは介護生活のスムーズな適応をはかり、認知症の人が住み慣れた地域で長く生活をするための対策ともなる。これまで介護準備態勢については退院時や女性介護者を対象とした（片山，2006）報告はあるが、男性高齢者（夫）を対象とした報告はみあたらない。

2．研究の目的

本研究は、夫の認知症介護準備態勢の自己評価尺度を開発し、その信頼性・妥当性を検討することを目的とした。

3．研究の方法

1) 用語の定義

介護準備態勢：介護についての知識や方法の理解、介護することの心構えや対処していく力として、命名した。

2) 質問紙の作成

質問項目は、夫介護者の面接内容と先行研究の検討から作成した。主な項目として、ソーシャルスキル、認知症の知識、家事・介護の知識経験、夫婦間の愛情の5つの概念とし、25の質問項目とした。

3) 対象者：60歳以上の男性高齢者（妻帯者）で、A市地区住民、自治会活動に参加している住民とその関係者、B県シニア大学の受講生とした。

4) 調査内容は (1)基本属性 (2)夫の認知症介護準備態勢の自己評価尺度の原案となる質問項目 (3)夫婦の愛情尺度 (4)介護に対する感情尺度 (5)暮らし向きと主観的健康感の関連変数とした。

5) 分析方法

項目分析の後 探索的因子分析は因子数の適合度を検定できる最尤法を指定し、因子の回転は斜交回転法とした。因子数は、スクリープロットの傾きや解釈可能性から検討した。因子負荷量 .40以上を採択の基準として .40未満の項目を除外した。抽出された因子に基づき、構成概念の命名を行った。内的整合性を検討するために、尺度全体および下位尺度 Cronbach's の係数を算出した。基準関連の妥当性を検討するために、夫婦の愛情尺度、認知症家族の介護に対する感情尺度との相関を算出した。さらに介護準備に関連する2変数（暮らし向き、主観的健康観）の比較は、一

元配置分散分析を行い、有意差が認められた場合は Tukey HSD(Tukey honestly significant deference)で多重比較をした。

6) 倫理的配慮

研究対象者に、研究の趣旨、研究の意義、倫理的配慮、データを本研究以外にも用いないこと等を文書と口頭で説明し同意を得た。大学研究倫理委員会の審査を受け、承認を得た。

4. 研究成果

1) 対象者の概要

分析対象は 274 人（有効回答率：72.7%）とした。対象者の年齢は、60 歳代が 79 人、70 歳代が 145 人、80 歳代が 49 人、平均 73.09 歳（SD=6.16）であった。

2) 項目分析

25 項目のすべての記述統計量から天井およびフロア効果を確認した、介護経験の 1 項目についてフロア効果がみられ除外した。他の 24 項目については天井効果およびフロア効果みられなかった。I-T (Item-Ttotal) 相関分析では、1 項目が相関係数 $r = .204$ と低かったため削除し、分析対象を 23 項目とした。

3) 探索的因子分析

23 項目において、最尤法・プロマックス回転による因子分析にて複数回行い、因子負荷量が低い（0.4 未満）因子負荷量が 2 因子にまたがる質問 8 項目を削除した。項目を削除しながら因子分析を繰り返した結果、4 因子 17 項目の尺度を作成した。因子抽出後の 4 因子について、回転後の負荷量平方和は第 1 因子 3.84、第 2 因子 3.69、第 3 因子 2.68、第 4 因子 2.46 であった。

4) 因子の解釈

抽出された 4 因子構造の解釈は次の通りであった。尺度の第 1 因子は 5 項目であり、妻は良き相談相手で自分のことを理解してくれたり気持ちを察してくれたり、妻との関係は良いと思っており、できる限り妻に尽くしたいという内容で、「夫婦の愛情」と命名した。第 2 因子は 5 項目であり、食事の準備、掃除、洗濯など家事全般をできる自信や買い物など家計費の管理ができる能力を指している内容で「家事遂行力」と命名した。第 3 因子は 4 項目であり、介護方法や介護についての学習、介護保険など外部支援の活用についての知識を問う内容で「介護に関する知識」と命名した。第 4 因子は 3 項目であり、困った時に相談できる相手がいたり、家族以外に気遣ってくれたり助けてくれる友人がいることの内容で、「助け合う仲間の存在」と命名した。

5) 信頼性の検討

尺度全体の Cronbach's 係数は全項目で $= .85$ であった。各因子では第 1 因子「夫婦の愛情」 $= .91$ 、第 2 因子「家事遂行力」 $= .87$ 、第 3 因子「介護に関する知識」 $= .84$ 、第 4 因子「助け合う仲間の存在」 $= .84$ であり、内的整合性を確認した。

6) 妥当性の検討

基準関連妥当性として、中高年期を対象とした愛情尺度、認知症家族の介護に対する感情尺度との関連は「夫婦の愛情」因子のみ相関 $r = .714 (p < .01)$ がみられ、他の因子は無相関に近い値であった。認知症家族の介護に対する感情尺度では夫婦の愛情のみに弱い相関 $r = .226 (p < .01)$ がみられ、他は無相関であった。暮らし向きと主観的健康観において、下位因子との一元配置分散分析にて主効果があった。

上記の結果から、男性高齢者の介護準備態勢には、要介護者を思いやる愛情が前提にあり、介護に関する知識を活用すると共に家事を遂行していくこと、介護ストレス解消に向けて、地域やソーシャルネットの支援を活用していく必要性が示唆された。

介護準備態勢評価尺度においては、各因子の Cronbach's 信頼係数は $.84 \sim .91$ であった。尺度全体の Cronbach's 信頼係数は $.84$ であり、本尺度の内的整合性が確保できていることが示された。

構成概念の妥当性については、当初設定した 5 つの概念のうち、4 つは探索的因子分析で採択した 4 因子と対応し、ほぼ同様の構造であった。ただし、「認知症の知識」に関する下位概念は採択されなかった。これはまだ介護に携わっていない段階では、妻の介護いわゆる他者を介護することと、認知症は自分の事として受け止めていることが考えられた。介護することと認知症介護は別の概念でとらえており、介護未経験者が認知症介護をイメージすることは難しいと考えた。基準関連妥当性をみるために、中高年期を対象とした愛情尺度、認知症家族の介護に対する感情尺度との関連を検討したが、どちらも弱相関から無相関と関連性が見出されなかった。これは 2 つの尺度が一元的な概念で構成されているのに対して、本尺度が異なる概念から構成され、一方向から測定できる尺度でないために、関連性が見出されなかったと考えた。暮らし向きと主観的健康感、分散分析にて有意な主効果があり、ある程度の妥当性が示された。

介護準備態勢自己評価尺度は、まだ介護に携わっていない男性高齢者が、将来の介護においてどの程度準備できているかを自己評価して、介護準備の学習や心構えに活用できることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 根岸貴子
2. 発表標題 夫が認知症の妻を介護する過程で直面する介護課題の克服プロセス
3. 学会等名 第20回日本認知症ケア学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 根岸貴子 中澤明美
2. 発表標題 認知症の妻をもつ夫の介護初期の介護課題とその克服プロセス
3. 学会等名 第19回日本認知症ケア学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 根岸貴子
2. 発表標題 夫が認知症の妻を介護する過程で介護中期以降に直面する課題と克服
3. 学会等名 日本家族看護学会第25回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 根岸貴子 木内妙子
2. 発表標題 Visiting nurses' approaches toward husbands caring for their wives with dementia
3. 学会等名 13th International Family Nursing Association Conference (IFNA) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 根岸貴子
2. 発表標題 認知症の妻を介護する夫に対する訪問看護師・ケアマネジャーの支援
3. 学会等名 日本家族看護学会第24回学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 根岸貴子、柴田滋子、木内千晶
2. 発表標題 認知症の妻をもつ夫が介護役割に適應するプロセス
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 英子 (Suzuki Eiko) (20299879)	国際医療福祉大学・医療福祉学研究所・教授 (32206)	
研究分担者	柴田 滋子 (Shibata Shigeko) (90622077)	杏林大学・保健学部・講師 (32501)	
研究分担者	加藤 千恵子 (Kato Chieko) (50369865)	東洋大学・総合情報学部・教授 (32663)	